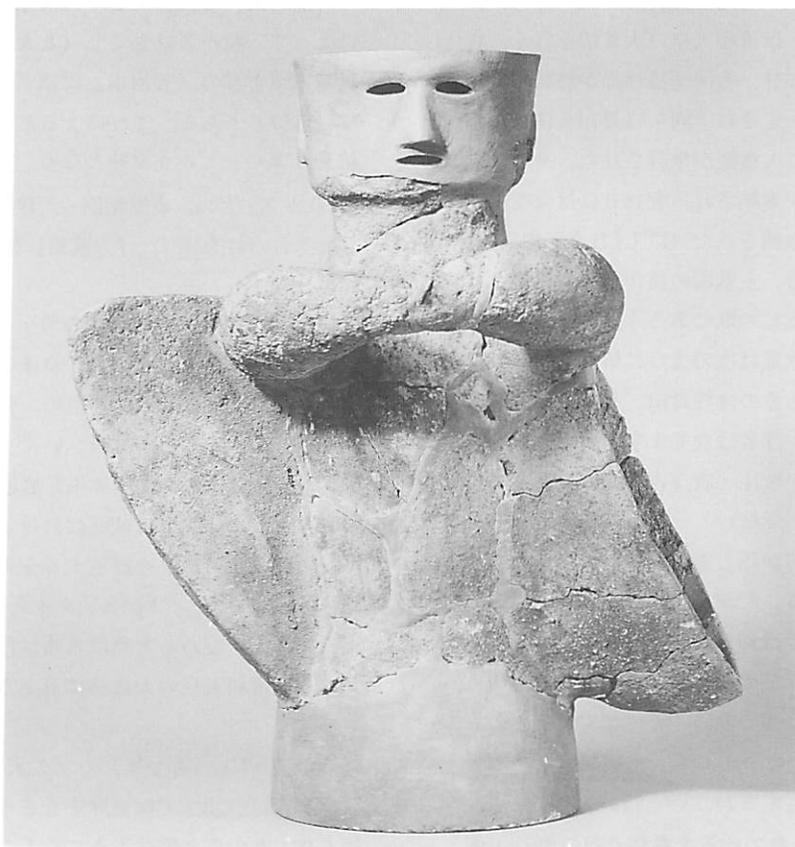


大 博物館だより

No.12
1994. 9

津山郷土博物館



人物埴輪 津山市日上畝山古墳群出土 津山市教育委員会蔵

日上畝山古墳群出土。この古墳群は1号墳（天王山古墳）を除き、5世紀後半頃から6世紀前半頃まで継続的に造られた60数基の円墳からなる。このうち畝山50・51(80)・52号墳は墳丘を削平され周溝のみが検出された古墳である。51号墳は全長31mの前方後円墳、50・52号墳はその南に接する小規模な円墳である。人物埴輪の破片には50号墳・52号墳と2種類の注記があるが、両者は接合して1個体となる。おそらく52号墳から出土したのであろう。

人物埴輪は2個体あり、その一つが巫女形埴輪である。現状復元高43cm、左右38.5cm、奥行25.5cm。

頭部は後頭部と左耳の一部がわずかに存するのみで、目・鼻・口などを含めて大部分復元である。頭髪部は復元していないが、他の類例からみて髻を結っていると推定される。両腕は前方に伸ばし、何かを捧げるような形を呈する。左肩から脇にかけて大きな袋状の衣を掛けているが、これは上着の一種であるおすい襲といわれている。右肩にも羽根状の突起をもつが何を表すのか不明。胴部中央の左右には一対の円孔が穿たれている。円筒部下端はすべて復元。このような姿は女性の巫女を表したものと考えられる。

「久米の佐良山」考

1

『古今和歌集』巻20、1083番に著名な「久米の佐良山」の歌がある。

美作やくめのさら山　さらさらにわがなはたて
じ　よろづよまでに
これは水のおの御べのみまさかのくにのうた
(『古今和歌集』日本古典文学体系8　岩波書店)

「水のおの御べ」とは清和天皇の大嘗祭を言う。貞観元年(859)4月15日、参河国播磨郡が悠紀、美作国英多郡が主基に卜定され、同年11月16日深夜から翌17日未明にかけて大嘗祭が挙行された。その後、悠紀国の風俗歌舞が奉納され、翌18日には今度は主基国の風俗歌舞が奉納された(以上『日本三代実録』貞観元年条)。この時、主基国の美作国から奉納された歌が先の『古今集』の歌であろう。

ところで、その歌意は次のように解釈されている。

美作の久米にあるのは佐良山。その山のように
さらにさらに、浮名は立てますまいよ。未来永劫に。
(小沢政夫校注・訳『古今和歌集』日本古典文学全集　小学館)

従って、これは男が隠し妻である女に贈った恋の歌ということになる。だが、永遠に二人の関係を公表しないというのでは何と悲しい恋なのであろうか。だとしても、はたして男が女にこのような歌を贈るであろうか。また、恋の歌に「万代までに」との表現は仰々しくはないか。しかも、大嘗祭に恋の歌を奏上するというのもふさわしいとはいえない。『古今集』巻20に収められている大嘗祭の際の他の4例も恋の歌は全くなく、1082番の「まがねふくきびの中山」を除けば、天皇の世をことほぐ儀礼的な歌ばかりである。その「きびの中山」の歌意も中山の山麓をめぐる細流の清浄さを歌ったもので、ある意味で大嘗祭にふさわしいともいえる。このように、「久米の佐良山」歌に対する通説にはさまざまな疑問がもたれるのである。

2

そこで、筆者の注目するのが『催馬楽』美作の歌である。

美作や　久米の　久米の佐良山　さらさらに
なおや　さらさらに　なおや　さらさらに　我

が名　我が名は立てじ　万代までにや　万代までにや
(『古代歌謡集』日本古典文学大系3　岩波書店)

『催馬楽』とは宮廷歌謡の一つで、日本古来の歌謡を唐楽の拍子・旋律に合わせて編曲したもので、8世紀末か9世紀初めに成立し、10世紀前葉頃までに整備されたと考えられている。(小西甚一「催馬楽」『国史大辞典』6　吉川弘文館)。この美作の歌が先の『古今集』所載の歌の改作たることは明白である。その『催馬楽』では、平安時代後期書写の「鍋島家本」によって「我が名は立てじ(太天之)」とあるが、12世紀末頃書写の「天治本」には「我が名は絶えじ(太衣之)」とある。これによると「決して私の名を絶やすまい」という意味となる。

「我が名」とは、藤原朝臣・大伴宿称など天皇から与えられた姓を指す。『万葉集』巻18の4098番の歌に、

(前略)物部の　八十伴の男も　己が負へる　己が名負ひて　大君の　任のまにまに　この川の
絶ゆることなく　此の山の　弥つぎつぎに　かくしこそ　仕え奉らめ　いや　遠永に(『万葉集四』日本古典文学体系7　岩波書店)

とあるように、姓とは朝廷における政治的地位の表示であり、その地位を継承する子孫に父系で受け継がれる。従って、「我が名」を永久に絶やさないとすることは、すなわち天皇に永遠に仕えるということであり、清和天皇の大嘗祭に奏上されるにふさわしい。

このように、『古今集』の「久米の佐良山」歌は「我が名は立てじ」では意味をなさないが、「我が名は絶えじ」とすると俄然生きてくるのである。もちろん、『古今集』の文字を『催馬楽』の、それも一写本によって改変することは史料論的に問題があることは重々承知しているが、上述のような理由により、あえて一説として「我が名は絶えじ」説を提起する次第である。

3

さて、「久米の佐良山」が美作国久米郡に所在することはほぼ確実であるが、具体的にどの山を指すかについては古来いくつかの説が対立している。

第1は嵯峨山(津山市中島、標高289m)説である。元禄4年(1691)成立の『作陽誌』に佐良山、一名嵯峨山とし、「倭歌所詠久米佐良山是也」とある。

この津山森藩の公的見解に依拠して、文化13年(1816)に津山松平藩士正木輝雄により現地に「佐良山」碑が建立された。

第2は笹山(津山市皿、標高301m)説である。享保10年(1725)成立の『作州記』33に「久米皿山、邑民露無といふ」(『吉備群書集成』第貳輯)とあり、露無山とは笹山の別称である。また宝暦12年(1762)刊と推定される『美作風土略』久米南条郡条に「久米皿山は当国の名所なり。則、皿村の上の山を云う。又笹山とも云ふよし。南の方に月見の池有り。」(同上)とあり、やはり笹山説をとる。

第3は神南備山(津山市一方上、標高356m)説である。嘉永5年(1852)成立の平賀元義『山陽道名所考』に「久米の佐良山は長岡郷一方村井口村の上へに在て、国府より南の方に見ゆる山なり。国府は苦東郡なるを、佐良山は久米の郡なれば郡名を冠らせて、国府より久米の佐良山といへるなり。」(『吉備群書集成』第壹輯)とある。

上記以外に、これら三山を含む佐良山地区の連山の総称とする説もあるが、三説の折衷にとどまり、特に積極的主張があるわけではない。

4

このように、久米の佐良山については江戸時代以来三つの説が対立している。まず、第3説から検討しよう。平賀元義は国府からの望見を重視する。確かに津山市総社にある国府から望見しうるのは三山のうち神南備山のみである。問題の歌が天皇に対する奉仕を誓った儀礼歌だとする私見では、作者は一般民衆ではなく、郡司級の地方豪族ないし国司などの中央貴族に比定されるので、元義の国府望見説はなほ魅力的ではある。だが、国府から望む神南備山は、標高約150mの小田中丘陵越しのため全容はみえないし、しかも横山から西につづく連山の一高峰にすぎず、神南備山にふさわしい秀麗さはない。

貴族・豪族の作という点を重視すれば、作歌地点は国府よりはむしろ久米郡家がふさわしいのではなからうか。作者を地方豪族とすれば、久米郡の名所を読むのは久米郡司がふさわしい。中央貴族とみても、部内巡行のため国司はしばしば郡家に駐在する。その久米郡家に比定される久米町宮尾遺跡からよく望まれるのは三山のうち嵯峨山のみである。

さらに、神南備山説には根本的弱点がある。それは『作陽誌』が「神南備山」を名所としながらも、

「久米の佐良山」説に全くふれないということである。従って、その神南備山説は江戸時代前期には存在せず、幕末になって唱えられた新説と思われる。

第2説は『作陽誌』にすでにみえる。すなわち、「或人」の云わく、嵯峨山が中島村にあるに対し笹山は佐良村にあり、古歌の佐良山は佐良村にある山がふさわしい、と。これに対し、『作陽誌』は古は中島・古城・暮田・作良の4村を1村として作良村と称したとする。しかも、山上よりの眺望が嵯峨山がはるかに優っていることから、嵯峨山説を正解とするのである。

5

以上の検討によれば、やはり『作陽誌』のかかげる第1説(嵯峨山説)が妥当と思われる。筆者はその補強意見として作良山の名称の由来をあげておきたい。これについては、古代豪族和氣氏にちなむとする説がある。すなわち、天長3年(826)僧真体が亡妹和氣朝臣のために美作国作良莊他を京都神護寺に寄進している(『統遍照発揮性靈集補闕鈔』8)ことから、佐良莊がもと和氣氏の莊園であったことが知られる。そして、この「佐良」の地名を和氣清麻呂の高祖父佐波良にちなむとするのである。

佐波良は天平5年(733)生まれの清麻呂の4世の祖であり、7世紀後半頃の生まれと復元される。上記の説によれば、佐良の地名は8世紀以後の比較的新しいものとなるが、859年の大嘗祭に奏上された「久米の佐良山」がそのように新しい地名とは考えにくいのではあるまいか。和氣氏が美作と密接な関係にあることは事実であるが、そのことから美作の特定の地名を和氣氏の人名と結びつけることは無理である。

筆者は、佐良山の名称の由来を三好基之の示唆するように、食器の皿にちなむ名称と考える(『津山市史』第1巻)。『日本書記』神武天皇即位前紀に神武が天香山の埴土をもって天平彗80枚を作り天神地祇を祭ったとする伝承からもうかがえるように、平彗(皿)は単なる食器ではなく神聖な祭器としても意識されていた。とすれば、佐良山は皿をふせたような山容の嵯峨山が最もふさわしい。しかも、その山容は久米郡家推定地の宮尾遺跡付近から望むとき最もすぐれている。このように解釈すれば、4に述べたような作歌事情ともよく合致するのではなからうか。(湊 哲夫)

これからの展覧会

平成6年度特別展 飯塚竹斎

平成6年10月8日(土)～11月13日(日)

飯塚竹斎(1796～1861)は江戸後期の津山藩士・画家。広瀬半助の三男で名は蕙、通称は漢之丞のち与作。字は君鳳、竹斎と号す。飯塚家の養子となり、藩の小納戸方などを勤めた。

若年のころ同藩の広瀬台山に南画の手法を学んだとされる。また、津山洋学との関わりの中で西洋画法を摂取した可能性も指摘されている。残された作品の多くは、台山風の山水画が多いが、花鳥画や人物画もみうけられる。

今展覧会では、竹斎の30点余の作品を展示して、その画業を考えようとするものである。

記念講演会

演題／「江戸時代の御用絵師について」

講師／狩野博幸 京都国立博物館美術室長

日時／10月16日(日) 14:00～16:00

場所／津山郷土博物館2階研修室

聴講／無料(ただし入館料が必要)

第12回企画展

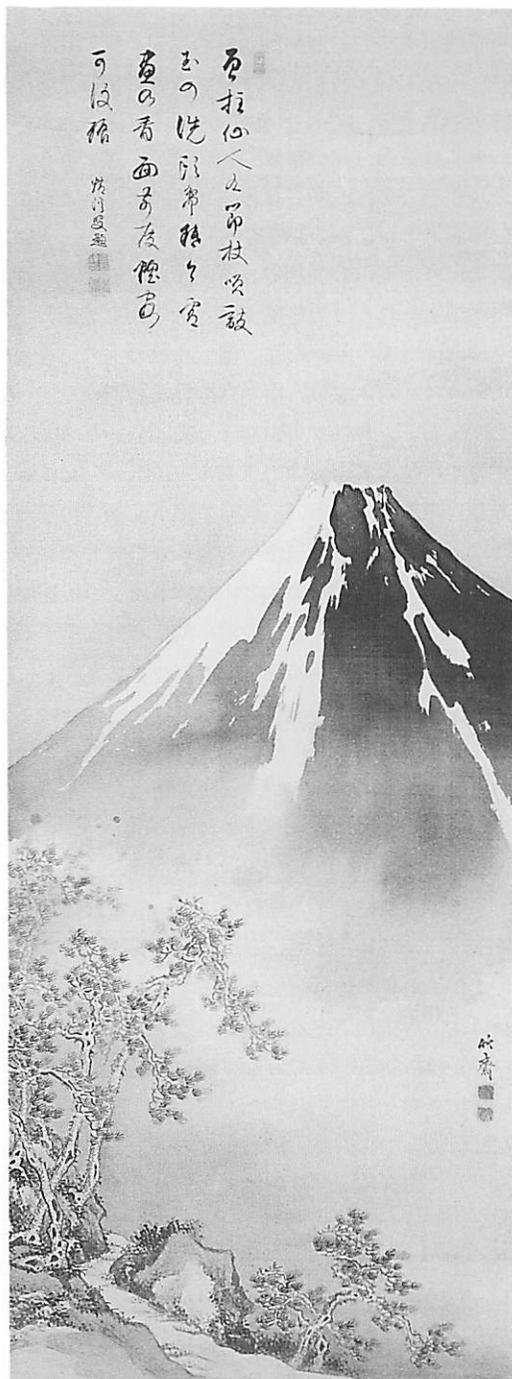
美作の須恵器— 5世紀を中心に —

平成7年3月18日(日)～4月23日(日)

美作各地から出土した5世紀の須恵器を集成し、その編年と技術史上の意義をさぐる。

主な展示資料

- | | |
|------------|-------------------|
| 甕 | 津山市押入西1号墳出土 |
| 甕 | 津山市一貫東8号墳出土 |
| つき杯 | 津山市一貫西2号墳出土 |
| はそう
壺 | 津山市一貫西3号墳出土 |
| 壺 | 津山市長畝山北6号墳出土 |
| たかつき
高杯 | 津山市長畝山北8号墳出土 など多数 |



富嶽小径図 飯塚竹斎筆 個人蔵

<博物館入館案内>

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一般 200円(160円)
※()は30人以上の団体

大 博物館だより No.12

発行年月日／平成6年9月15日

編集・発行／津山郷土博物館

〒708 岡山県津山市山下92

TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874

印刷／有限会社神谷印刷所

大 は、旧津山松平藩の楯印で剣大といい、現在津山市の市章である。